



Profile

さんゆうてい・えんそう / 1940年東京生まれ。69年真打に昇進し、6代目三遊亭圓窓を襲名。口演する古典落語「ぞろぞろ」が小学校4年生の国語の教科書に採用されている。主な著書に『落語の授業』などがある。

子どもに教えたい聞く力 「聞き上手」こそ「話し上手」

全国の小学校に出向き、落語の授業を続ける圓窓師匠が教えるのは「聞く」ことの大切さだ。二親にも「よき教師たれ」と訴える。

人間、まずは聞くことから始まるんですよ。赤ちゃんは胎内にいる間からお母さんの声に触れ、おぎゃあと生まれてからも両親の声を聞き、それを真似することで育っていく。聞いて真似していくうちに、言葉の意味を理解し、交流できるようになります。話すことが第一とよく思われていますけど、そうじゃない。最初は「聞く」で、その後「話す」なんです。聞くことが上手になれば、話

すことも上手になる。

今の教育はそこを間違えちゃっている。聞くことは誰でもできる、当たり前だと思っているから学校で勉強するのも「読み書き」でしよ。だから、ますます聞く能力、話す能力が失われていく。さらにはテレビやパソコン、ゲーム、それに教科書も全部、見せることに重きが置かれていますね。そうすると、読み書きのほうも衰えてくる。

人間は、教えずとも好き嫌いを判断する能力を持っています。赤ちゃんだって、気に入らなければ泣くし、機嫌がよきや笑いますよね。教育の役割というのは、もう一つの判断力つまりいいことと悪いことの判断力

特別インタビュー

三遊亭圓窓

●落語家

噺家が考える「上手な聞き方」のコツをお教えしましょう。例えば、あたしは普段の会話でも相手の目をきちんと見るようにしているんです。落語は一人で何人も演じますね。誰と話をしているのかは、「上手」(客席から見て右)と「下手」(同左)への目線を使って表します。演者は常に目線の向こうに相手がいるつもりで、その目を見て話します。

だから、落語では話す人も聞く人も相手の目を見ている。会話というのは口と耳だけでやるもんじゃない。目も大いに大事だということを教えているんです。

ところが、今の人は目をそらしますね。そうすると情報は100%伝わらないでしょう。2割、3割へと落ちてしまう。絶対に損ですよ。目と目をぶつけ合って初めていいコミュニケーションが取れるんです。「目は口ほどにものをいう」ということわざはよく知られていても、きちんと活用されていませんね。

いい悪いの判断を教える教師となるべきは二親

人間は、教えずとも好き嫌いを判断する能力を持っています。赤ちゃんだって、気に入らなければ泣くし、機嫌がよきや笑いますよね。教育の役割というのは、もう一つの判断力つまりいいことと悪いことの判断力

聞き上手になるコツ

4-3 圓窓流「聞き方」の要諦

- ① 話し相手の目を見る
- ② 心を込めて相づちを打つ
- ③ 「それ、知っています」とは言わない
- ④ 時々質問する
- ⑤ 肝心なことはメモを取る
- ⑥ 話し相手の人間性そのものに興味を抱く

を身に付けさせることでしよう。

その教育をするのは、まずは親です。あたしは「二親が教師たれ」とよく言っているんです。学校に預けてしまつて親に責任がないってことになるから、モンスターパーアレントが出てくる。最高の責任者であり、一番素晴らしい教師は親だと。両親が教師で子どもが生徒ということとは2対1ですよ。こんないい個人レッスンないでしょう。

落語の登場人物には悪人はいません。暴力やいじめなどない、健全な芸能なんです。また落語は失敗談ですから、失敗が大事だと教える効果もあります。個人レッスンに落語を使ってみてはいかがでしょう。(談)